



TESTAMENT

booklet note

Japanese

SBT 1486

1961年のエディンバラ国際音楽祭には錚々たるアーティストが登場した。カラヤン指揮のベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ストコフスキー指揮のロンドン交響楽団、ジュリーニ、ホーレンシュタイン、クレンペラー、アニー・フィッシャー、そしてクリフォード・カーゾンである。

カーゾンはこの音楽祭に何度も登場しているが、この年にはアッシャー・ホールでのシューベルト・プログラムに参加した。このプログラムの前半はアマデウス四重奏団による弦楽四重奏曲変ロ長調 D.112 とカーゾンによる D.899 の即興曲全曲が演奏された。後半は、出演アーティストによる五重奏曲《ます》解釈の公開セミナーだった。2日後の雨天の火曜日の朝、カーゾンはリース・タウン・ホールでのリスト・プログラムに参加した。（この年はちょうどこの作曲家の生誕 150 周年のアニヴァーサリーであった。）エリーザベト・ゼーダーシュトレームやジェラルド・ムーアが歌曲を披露し、カーゾンはレパートリーから 3 曲の小品とコンサートの最後に名高いロ短調のソナタを演奏した。その演奏は最高の出来ではなく、ある評論家は「説得力に欠く」と評した。後にこの演奏は CD 化もされたが、完全主義者のカーゾンはこのリリースを喜ばなかった。

しかしながら、シューベルトのコンサートは大成功で、この盤に収録された D.899 の即興曲集の演奏はカーゾンが当代最高のシューベルト弾きであることを証明している。実際、あまりに感動した客席はそれぞれの作品の間の拍手をしないではいられなかった。カーゾンの演奏は、澄んだやさしさから抑制された攻撃性までの幅広い情感が込められていただけでなく、ピアノから紡ぎ出される一音一音が注意深くコントロールされており非常に印象的である。これこそがカーゾンの真骨頂と言える。カーゾンを唯一無二のピアニストとしているのは、鍵盤から生み出される音色の完璧さと、楽曲解釈と響きの選択における知的さの結合と言える。これらの能力は間違いなく、2年に渡るアルトゥール・シュナーベルから受けた教えによってもたらされたと言ってよい。カーゾンはこの偉大な師について

以下のように述べている。「私に行くべき道を明らかにしてくれたのはシューナーベルでした。音楽とピアノに対するアプローチに深みと奥行きを与えてくれました。」第1曲の即興曲を聴けば、カーゾンが望んでいるのは音の美しさではなく、左右の手、各パート、そして声部のバランスであることがわかる。シューベルトの珠玉のメロディーを左手が支えるバランスは絶妙である。この作品に限って言えば、ライブのほうが圧倒的に出来がよい。カーゾンはリストとシューベルトの小品を1961年12月にBBCの放送用に録音をしているが、この時はなぜか最も本質的といえる第1曲が省略されており、他の3曲しか演奏されていない。

音楽祭のハイライトはカーゾンによるモーツァルトのピアノ協奏曲第27番変ロ長調だった。(8月31日)この作品はリスト・リサイタルの翌日にロンドンに戻り、プロムスでも演奏された。エディンバラではヤッシャ・ホーレンシュタイン指揮ベルリン・フィルとの共演(残念ながらBBCのアーカイブにはこのテープは残っていない。)は、評論家ネヴィル・カーダスに言葉を失うほどの感動を与えた。「率直に言って、カーゾン氏の解釈を言葉で表現することはほとんど不可能である。タッチの完璧さと至高のフレージングが一体となる。一音一音が光輝くようで、心臓の鼓動や星の瞬きを内包していた。どの音も他者との関係性(若しくは愛情)に満ちている。このすばらしい音楽体験を我々はカーゾン氏にただただ感謝するしかない。この至福の音楽をカーゾン氏と演奏したベルリン・フィルを指揮したのはホーレンシュタインだった。オーケストラの演奏は極力抑えられており、地上のオーケストラに天国からピアノの音が降り注ぐような効果を与えた。」このCDで聴けるプロムスの演奏では、バックはサー・エイドリアン・ボルト指揮のロンドン交響楽団が務めている。ボルトのプロムス出演は1958年以來のことだった。こちらの演奏は、スムーズでありながらエレガントで、指揮者によって弦と木管楽器が絶妙にコントロールされており、完璧を旨とするカーゾンのスタイルにマッチしている。とりわけ終楽章では、オーケストラの音量をカーゾンに最適にコントロールしており、前述の評論家ネヴィル・カーダスが伴奏としてはベルリン・フィルよりロンドン響のものを支持したと考えるを得ない。

プロムスそのものは福袋のようなプログラムであった。ブゾーニの喜劇的序曲で始まり(ボルトは生涯かけてファウスト博士の擁護者であった。)、コンチェルトの後にはシューベルトの交響曲第9番《グレート》が演奏された。後半のプログラムは没後10周年を記念して演奏されたシェーンベルクの合唱曲《深き淵より》作品50bとバッハの3台の鍵盤楽器のための協奏曲(二短調、3人ともあまり知られていないピアニストが起用された。)という少々奇妙な組み合わせであった。

エディンバラに続き、カーゾンのモーツァルトは大成功を収めた。ある評論家は8本のコントラバスは多すぎると批判したが、カーゾンの評価では他の評論家に同意している。「カーゾン氏は非常

に美しい洗練と見事な指使いのピアニズムを融合させた。解釈は無邪気ともいえるほど実直で、真に偉大で円熟したアーティストにのみ許される域のものだった。」

Jonathan Summers, 2013

訳：小林茂樹